

秋篠寺沿革略記

奈良時代末期宝亀七年（七七六）、光仁天皇の勅願により地を平城宮大極殿西北の高台に占め、薬師如来を本尊と拝し僧正善珠大徳の開基になる当寺造営は、次代桓武天皇の勅旨に引き継がれ平安遷都とほぼ時を同じくしてその完成を見、爾来、殊に承和初年常曉律師により大元帥御修法の伝来されて以後、大元帥明王影現の靈地たる由緒を以って歷朝の尊願を重ね真言密教道場として隆盛を極めるも、保延元年（一一三五）一山兵火に罹り僅かに講堂他数棟を残すのみにて金堂東西兩塔等主要伽藍の大部分を焼失し、そのおもかげは現今もお林中に点在する数多の礎石及び境内各処より出土する古瓦等に偲ぶ外なく、更に鎌倉時代以降、現本堂の改修をはじめ諸尊像の修補、南大門の再興等室町桃山各時代に亘る復興造営の甲斐も空しく、明治初年廃仏棄釈の嵐は十指に余る諸院諸坊とともに寺域の大半を奪い、自然のまゝに繁る樹林の中に千古の歴史を秘めて佇む現在の姿を呈するに至っている。

当寺草創に關しては一面、宝亀以前當時秋篠朝臣の所領であつたと思われる当地に既に秋篠氏の氏寺として営まれていた一寺院があり、後に光仁天皇が善珠僧正を招じて勅願寺に変えられたと見る説もあり、詳しくは今後の研究を待つ外ないが、当寺の名称の起りを解明する一見解として留意すべきである。

なお宗派は当初の法相宗より平安時代以後真言宗に転じ、明治初年浄土宗に属するも、昭和二十四年以降単立宗教法人として既成の如何なる宗派宗旨にも偏することなく仏教二千五百年の伝統に立脚して新時代に在るべき人間の姿を築かんとするものである。

年中行事

一月五日
大元帥明王初会式
一月八日
薬師如来祈法会式
一月十五日
本願主光仁天皇御忌
二月節分
厄除祈年星供養
五月五日
大元帥明王護摩法要
五月二十五日
開山（善珠僧正）忌
十月五日
大元帥明王別時会式
春秋彼岸中日
万靈供養会式
月参功德日
五日・十五日・二十五日

本堂

当寺創建当初講堂として建立されたが金堂の焼失以後鎌倉時代に大修理を受け、以来本堂と呼ばれてきたもの。事實上鎌倉時代の建築と考えるべきであるが様式的に奈良時代建築の伝統を生かし單純素朴の中にも均整と落ちつきを見せる純和様建築として注目される。桁行一七・四五米（五間）、梁間一二・一二米（四間）、軒高三・七八米、軒出二・二九米。

堂内尊像

愛染明王（あいぜんみょうおう） 寄木造坐像赤色、推定鎌倉時代末期。瑜祇經愛染王品の所説によつて造顯され、一面真言宗の要典理趣經を具象化した明王とも考えられる。大愛欲大貪染三昧に住する尊で、人間の煩惱を以つて菩提心たらしめる法力を加備したまうと説かれる。

帝釈天（たいしゃくてん） 頭部乾漆天平時代、体部寄木造鎌倉時代、極彩色立像（後記伎芸天の項参照）。普通梵天と一対を成し仏法の守護神として崇められるが、もとはインド教に於ける軍神で、古くより様々の形でインド神話に現われる大神。衣紋の彫の強さ、上半身に見える引き締った厳しさ等に鎌倉彫刻の特性が感じられる。（重文）

不動明王 寄木造立像、極彩色、推定鎌倉時代末期。大日如来の使者として真言行者を守護し忿怒の御姿を以つて惡魔煩惱を滅除したまうと説かれ、平安時代以降広く信仰される。

薬師如来（薬師瑠璃光如来） 寄木造坐像素色、推定鎌倉時代後期。当寺本尊。左手に薬壺を持し、右手は施無畏印を成して衆生の病苦を除き安樂をもたらす慈悲尊と説かれ我国仏教の初期より薬師信仰は極めて盛んである。御面相等に貞観風の厳しさも感じられるが技法上かなり後世の作と思われる面が多い。（重文）

日光菩薩・月光菩薩 共に一木造立像、平安時代初期、当初は極彩色であつたと思われる。薬師如来本願經により、薬師如来の兩脇侍として造顯され、如来の太陽の光の如く温かい慈悲と、月の光の如く清らかな知慧を表すべく夫々の御手に鏡を持して各日輪及び月輪を示すもので、上代の作例としては珍らしい像形である。（重文）

十二神将 寄木造立像、極彩色、鎌倉時代末期。薬師如来の眷属として薬師如来の浄土、衆生を護る十二

別尊大元帥明王御縁起

大元帥明王(たいげんみょうおう)とは詳には大聖無辺自在元帥明王と称し、仁明天皇承和六年十二月常寧殿にて勅修以来、宮中に於てのみ修せられるべく御治定の鎮護国家の大法大元帥御修法(たいげんのみしほ)の本尊として重んぜられ、何地に於ても勅許を得ざる修法は勿論、尊像の造頭奉置も禁ぜられ、その結果我国唯一の像として当寺に伝わるものであるが、その因縁には、かつて常曉律師当寺の閑伽井に於て水底に落る自らの影を眺めるうち更にその背後に長大なる忿怒の形影の重なるを觀、甚だ奇特の思いを為してその形を圖繪し此を身に帶び、後日渡海入唐の時、折あつて此の尊法に遭うを得、先ず本尊を拜するところ正しく本國秋篠寺に化現の像と同じく、これを以て奇しくも明王常曉律師の求法に先立つて当寺香水閣閑伽井に示現せられたると知るべきを示す伝説があり、更にその機縁の故に永く禁裏御香水所として明治四年まで例年一月七日の御修法に際し献泉の儀を務めたる歴史を有つ。

なお、阿吒薄俱元帥大將上仏陀羅尼經修行儀軌(唐善無畏訳)の本文を取抄すれば左の如くである。
 我信じ我礼し我歸し奉る元帥大明王、此れは此れ大毘盧遮那の化、釈迦と諸仏の変、如来の肝心衆生の父母にして不動愛染等の諸々の威徳身、觀音無尽意虚空蔵等の諸々の菩薩身、聖天十二天等諸々の功徳心等一切を摂して衆徳莊嚴せり。或は金剛忿怒の相を現じ、或は菩薩大慈悲相を現じて類に随つて擁護したまふ。今願力の故に以つて大元帥明王となし、諸尊の中、最尊最上第一の威徳身を顯現す。若し一切世間有情の類、宝呪を持し宝号を称せんに、内外諸障を除きて、必ず世間出世間の願にこたえん。菩提心を成ぜんと願じ、乃至金剛心無畏心に住せん等の出世間の大願を發せんに正法護持の故に悉く願成就せん。又衆生あつて、正因縁に住し、災を息めんものは即ち願成就し、榮福を求めんものは即ち願成就し、勝利を為さんものは即ち願成就し、横病を離れんものは即ち願成就せん。明王の名を聞いて一度讃嘆せんものは、世間の宝果悉く円成す。かるが故に一切世間悉く当に大元帥に皈依すべし。

大元帥明王御真言

のうぼう たりつたばりつ ばらばりつ しやきんめい しやきんめい たらさんだん おえんび そわか

ながき夜の生駒おろしや寒からむ 壬生家隆
 秋篠の里に衣打つなり
 秋篠や外山の里や時雨らむ生駒の岳 西行
 に雲のか、れる
 あきしのや外山の里はきりたちて 福田行誠
 稲葉のすゑをわたるかりがね
 秋篠のみ寺をいでてかへりみる生駒 八一
 がたけに日はおちむとす(歌碑)会津
 諸々のみ佛の中の伎芸天何の
 えにしぞわれを見たまふ(歌碑)川田 順
 贅肉なき肉置の婀娜にみ面もみ腰も (歌碑) 吉野 秀雄
 ただうつつなし
 秋篠の伎芸天女の印むすぶゆび 鈴木光子
 細々と空に定まる
 伎芸天女寒きしじまの夕にすら句ひ 松山 ちよ
 こぼれて立たせ給へり 虚 子
 秋篠はげんげの畦の仏かな 素 十
 東門は少し小さく萩も咲き 青 畝
 一燭に春寧からむ伎芸天 秋 桜
 あしび咲く金堂の扉にわが触れぬ 汀 子
 一枚の障子明りに伎芸天 美 穂
 行春の女身ゆたかに伎芸天

